

愛冠岬のエゾシカ野生個体群における

メスジカの繁殖戦略に関する研究

厚岸湖・別寒辺牛湿原学術研究奨励金の研究事例をご紹介します

問い合わせ／水鳥観察館 ☎ 52 | 5988

水鳥観察館のホームページはこちら



厚岸湖・別寒辺牛湿原学術研究奨励補助金制度とは？

厚岸町では厚岸湖、別寒辺牛湿原、ほか町内の自然環境を次世代へ引き継いでいくため、専門分野の学生や研究者に支援をしています。このページでは、制度を活用した研究の一部をご紹介します。

シカの仲間の子育て

多くの哺乳類ではメスのみが子育てを行うため、メスが子育てにかかる時間やエネルギーの負担が大きくなっています。寿命が長い大型の哺乳類では生涯で何度も子育ての機会がありますが、一生で残す子孫の数を多くするためには、今いる子にどれだけ投資をするのかを、子の成長段階や性別、一度に育てる子の数によって調節し、最適化しなければなりません。シカの仲間では、天敵のリスクや子の運動能力の発達に合わせて子につきそう行動を調節したり、メスの子よりも将来多くの子孫を残すと期待できるオスの子に優先的に投資することが知られています。一方でメスを中心とした群れで生活する上では、メスの子と親密な関係を築くことで、成長しても群れに残るメスの子から利益を受けることができ、将来の子育てに有利に働くともいわれています。

北海道大学の吉田氏は町内の愛冠岬でエゾシカの親子の行動を観察し、子の成長段階や性別、同時に育てる子の数が、母親の子育て行動や翌年の出産にどのように影響するのかを調査しました。



▲ シカの子育て行動(左：授乳行動 右：近接行動)

調査結果

子ジカが成長するにつれて授乳行動は減少していきました。授乳は母ジカにとって時間やエネルギーがかかるため、子が成長し、自力で食事ができるようになると減少させると考えられます。また近接行動は子が成長するにつれて増加していました。子が小さく運動能力が低い時期は、子を木の陰などに隠し、距離を取って捕食者に気づかれないようにする一方、子が大きくなると母子と一緒に行動する戦略をとっていると考えられます。

子育て行動と子の性別について、特に生後間もなくはオスの子に比べて、メスの子への授乳行動が多くなっていました。エゾシカもメス中心の群れで生活するため、将来も群れの中に残るメスの子の生存率を向上させ、親密な関係を構築する戦略をとっている可能性があります。一方で母ジカは、メスの子に比べてオスの子との近接距離が近くなっていました。オスの子のほうが運動機能の発達が早く、より母ジカと一緒に行動していたことを反映していたと考えられます。

前年生まれの子(1歳)とその年生まれの子(0歳)の2頭を育てる母ジカは、0歳の子1頭のみを育てる母ジカと比べて、子との近接距離が近く、また翌年にも出産する確率が高くなっていました。1歳の子がいる母ジカは前年の子育てに成功している可能性が高く、子育て経験が少ない母親よりも必要な投資を適切なタイミングで行えると考えられます。そのため翌年の繁殖機会も確保しやすく、高い出産率につながった可能性があります。

まとめ

母ジカは、子の成長段階や性別、一度に育てる子の数によって子育ての投資量を変化させていることが分かりました。より詳細にシカの子育て行動について解明するため、今後も長期的に観察を続ける必要があります。

北海道大学の吉田桃子氏らによる『愛冠岬のエゾシカ野生個体群におけるメスジカの繁殖戦略に関する研究』より。報告書などの本文は、水鳥観察館のホームページで見ることができます。